

ランス美術館展 華麗なるフランス絵画

古典派、ロマン派、印象派そしてレオナール・フジタ

東郷青児記念・損保ジャパン日本興和美術館 2017.04.22～06.25



シャンパンと大聖堂で名高いフランス・北東部の古都ランスにある「ランス美術館」は、フランス各派の美術品を網羅し、肖像画や20世紀の画家たちの作品など世界的に知られる「フランス絵画」の宝庫とされている。

今回の展覧会では、バロック、ロココ、バルビゾン派や印象主義など、フランス美術400年の輝かしい作品の数々を紹介し、17世紀の宮廷画家の華麗な作品や、新古典主義やバルビゾン派の代表的な作品を紹介している。

19世紀末には「印象派」が誕生し、「カミュ・ピサロ・アルフレッド・シスレー」などが描く新しい光に満ちた絵画が作成された。

もう一つの見どころは、当地で晩年を過ごした「藤田嗣治（レオナール・フジタ）」の珠玉とされるフランス絵画の力作「約70点」の作品の展示である。

『注目される展示作品』

ポール・ゴーギャン《バラと彫像（部分）》 1889年 油彩/カンヴァス

画面の下半分がピンクのテーブルで、上半分は茶と青の2色に塗り分けられた壁、手前には緑の水差しの上部が何気ない部屋の一瞬に見えながら、十分に計算された画面の構成で完璧な調和を生み出している作品である。

カミュ・ピサロ：《テアトル・フランセ広場 雨の効果》 1897年油彩/画布



印象派の巨匠「ピサロ」が、ホテルの一室から眺めた都市風景作品の一つで、絵の中央にオペラ座の大通りを、右手にてアトル・フランセーのどっしりとした建物を配して、広い一体を平衡させている作品である。

オペラ座通りへと続く路面は、雨に打たれ鏡のように街や行き交う人々を反射し路面に映しだしている。

レオナール・フジタ、ランス特別コレクション

エコール・ド・パリの寵児として活躍した「フジタ」は、乳白色の画肌を駆使する独創的な技法がパリ画壇で称賛を浴び、1959年にカトリックの洗礼を受け、題材にキリスト教にかかわる「聖母像」を描くのは生涯の課題であった。